

病虫害発生予報 第2号(5月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2301

＜予報の概要＞

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	もみ枯細菌病による苗腐敗症 褐条病 ばか苗病 いもち病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病(紀北地域) ツマク、ロヨコハイ イネミス、ソウムシ	やや少 やや少 やや少 並 やや多 やや多 やや少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 黒点病 灰色かび病 ミカンハダニ ヤノカイガラムシ チャノキイロアザミウマ	並 やや少 並 並 並 並
			カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 チャノキイロアザミウマ	並 やや多 並 並
タマネギ	灰色かび病 べと病 軟腐病	並 並 並	果樹全般	カメムシ類	やや少
ウリ類	モザイク病 斑点細菌病	並 並			
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	並 並 並			

気象予報

1か月予報(予報期間 4月23日～5月22日 大阪管区气象台)

＜特に注意を要する事項＞

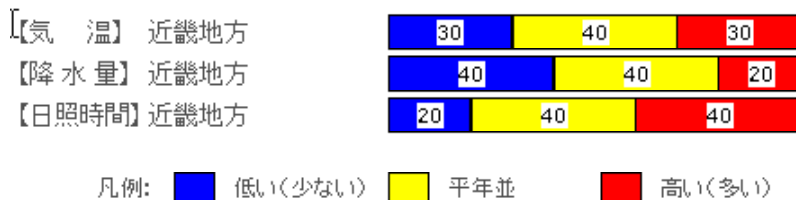
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞



	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量(平年値) (mm)
5月	和歌山 19.3	和歌山 150
	潮岬 19.1	潮岬 249

I. 水 稲

1. もみ枯細菌病による苗腐敗症

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるもみ枯細菌病の本圃での発生面積率は0%（平年7.6%）で、発病した圃場はみられなかった。

② 5月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病ほ場から採種した種子は使用しない。

② 種子は塩水選を行い、銅含有剤（テクリードC剤等）で消毒する。その後の浸種は停滞水で行い、2日間は水を交換しない。

③ 浸種から育苗中の温度管理に注意し、30℃を超えないようにする。

2. 褐条病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 平成12年にやや多発したが、その後平成22年まで少発生に推移している。

② 5月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① もみ枯細菌病による苗腐敗症の項参照

3. ばか苗病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるばか苗病の本圃での発生面積率は4%（平年6.4%）とやや少なかった。

② 種子消毒に用いる薬剤の効果は安定している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 種子消毒を行う。

4. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 種子消毒を徹底する（自家採種では塩水選もあわせて実施する）。

② 田植え時に育苗箱処理剤を施用する。

5. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 ヒメトビウンカ やや多 ・ 縞葉枯病（紀北地域） 多

(2) 予報の根拠

① 4月中旬の休閑田における20回振り搦り取りによる平均生息数は、紀の川市で12.3頭（平年8.3頭）、和歌山市で13.0頭（平年7.9頭）、かつらぎ町で6.3（平年5.9頭）とやや多かった。

② ヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市で15.3%（前年17.7%）、かつらぎ町で19.1%（前年11.3%）であった。これらの保毒虫率は、平成3～12年の平均（2.8～3.4%）より高い。

③ 平成22年8月の紀北地域の本田におけるイネ縞葉枯病発病株数は、25株あたり0.6株（平年0.04株）と平年に比べて多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。
- ② 田植え時はヒメトビウンカに効果があるアドマイヤー粒剤などを育苗箱施用する。
- ③ 第1世代成虫は6月下旬に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。
- ④ その他、病虫害発生予察注意報第1号参照のこと。

6. ツマグロヨコバイ

- (1) 予報内容 発生時期 やや早 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 4月中旬の休閑田における20回振り搦り取りによる平均生息数は、紀の川市で0.3頭（平成26頭）、和歌山市で36頭（平成68頭）、かつらぎ町で43頭（平成93頭）であった。
 - ② 越冬世代の50%成虫化時期は3月5半旬（平成3月6半旬）と平年に比べてやや早かった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 前年発生が多かった地域では、田植え時に粒剤を育苗箱施用する。

7. イネミズゾウムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察灯による4月の誘殺数は4半旬現在、那智勝浦町0頭（平成1.2頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 田植え時に粒剤を育苗箱施用する。
 - ② 5月中旬までに田植えする地域のうち、多発地ではさらに田植え3～4週後に薬剤を処理する。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 灰色かび病（白斑葉枯病）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 4月3半旬現在、紀北地域での発生ほ場率は0%（平成1.1%）であった。
 - ② 5月の降水量は、平成並または少ない確率ともに40%である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生ほ場では早めに防除する。

2. ベと病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 4月3半旬現在、紀北地域での発生ほ場率は19.4%（平成13.8%）であった。
 - ② 5月の降水量は、平成並または少ない確率ともに40%である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① リドミルMZ水和剤は連用すると耐性菌の出現が懸念されるので、1～2回の使用にとどめる。

3. 軟腐病

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 4月3半旬現在、紀北地域での発生ほ場率は0%（平年0.7%）であった。

② 5月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 降雨前後を重点に薬剤防除を行う。

<ウリ類>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 4月4半旬現在、紀の川市、日高郡美浜町のハウス栽培キュウリにおける発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

② アブラムシ類の発生は並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. 斑点細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 4月4半旬現在、紀の川市、日高郡美浜町のハウス栽培キュウリにおける発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

② 5月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設内の換気を良くして湿度低下を図る。

② 薬剤防除は予防散布を重点に行う。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 和歌山市のキャベツでは4月3半旬現在、発生株率はモモアカアブラムシ21%（平年21%）、ニセダイコンアブラムシ0%（平年3.6%）であった。

② 4月の黄色水盤への飛来数は、4半旬現在46頭（平年76頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行なう。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 那賀地域のイチゴでは4月4半旬現在、ナミハダニは、発生ほ場率0%（平年30%）、寄生葉率0%（平年7.2%）と少なかったが、カンザワハダニは、発生ほ場率40%（平年26%）、寄生葉率4%（平年5.8%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① スイカでは、早くから寄生するほ場外縁部の株をみて、早期発見に努め初期防除を行う。

② 同一系統の薬剤を連用しない。

3. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 那賀地域のイチゴでは4月4半旬現在、発生ほ場率40%(平成35%)、寄生密度は1花あたり0頭(平成0.3頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生密度の低いときから薬剤防除を行う。

Ⅲ. 果 樹 ＜カンキツ＞

1. かいよう病

(1) 予報内容 春葉初発日 5月4～5半旬(平成並)
春葉発病量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)の春葉における越冬病斑の発病葉率は15.1%(平成17.1%)と平成並であり、夏秋梢にも越冬病斑がみられた。昨年10月の巡回調査によると、発病園率は14%(平成17%)と平成並であり、夏秋梢での発病もみられた。

② カンキツの発芽期は、「興津早生」(ウンシュウミカン)で4月13日、「清見」で4月14日と、いずれも平成よりやや遅かった。

③ 5月の降水量は、平成並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 常発園、前年多発園、罹病性品種のある園で発芽前の防除を行っていない場合は、銅水和剤(炭酸カルシウム剤200倍加用)の予防散布を徹底する。ただし、新葉における薬害(葉焼け)に注意する。

② 常発園や罹病性品種のある園では、罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

2. そうか病

(1) 予報内容 発生時期 平成並
発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)における越冬病斑の発病葉率は66.0%(平成69.8%)と平成並で、近年の発生予察巡回調査における発病は一部の常発園を除くと平成より少なく、一般防除園での越冬病斑量は少ないと思われる。

② カンキツの生育は、「興津早生」(ウンシュウミカン)の発芽期が4月14日と平成よりやや遅かった。

③ 5月の降水量は、平成並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 本病害には発芽直後の防除が高い効果を示すので、常発園や前年多発園では早急に散布する。一般園では満開期に黒点病、灰色かび病を防除する際、そうか病にも登録のある薬剤を用い防除する。

② 園内の通風採光をよくし、枝が徒長しない肥培管理に努める。

3. 黒点病

(1) 予報内容 発生量(初期感染) 並

(2) 予報の根拠

① 近年、園内外に放置された枯枝及び樹冠内の枯枝量はやや多く、伝染源密度はやや高くなっていると思われる。

② 5月の降水量は、平成並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹上及び園内外に放置された枯枝を処分する。

② 早生温州、極早生温州、ネーブル等は、花卉離脱直後からの初期感染に注意が必要であり、防除を徹底する。

4. 灰色かび病(開花期)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 連年発生が多い園では、開花期～落弁期の天候に留意し、満開期に防除を行う。

5. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)における4月中旬の発生は平年並、マシン油乳剤を散布している慣行防除園における発生は認められなかった。

② 5月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 冬期から春期にかけてマシン油乳剤を散布していない園では、夏用マシン油乳剤200倍の散布を行なう。ただし、開花期に近いと実害は少ないが奇形花を発生させることがあるので注意する。

6. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 第1世代1令幼虫初発日
5月4半旬(並)

発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)における越冬完了歩合、寄生量は平年並であった。

② 昨年10月の巡回調査では、発生果率は0.4%(平年0.5%)、発生園率は9.1%(平年7.5%)と平年並であった。

③ 第1世代1令幼虫初発日は、予察式 $Y = 57.03 - 0.109X$ により求めた。

ただし、 $X = 3$ 、4月の最高気温^{*1}(11℃超の各日の気温) - 11℃の積算、 Y は5月1日を起点とした日数であり、 $Y = 18.7$ 日(予測式 Y の平年^{*2}16.1日、予察ほ場の樹上における実際の初発日の平年は16.0日)であった。

※1：予測式に使用した最高気温は、3月1日～4月19日まで本年の実測値を用い、4月20日～30日は平年値を代用した。

※2：予測式および樹上における初発日の平年は1981年から2010年までの値を使用した。

7. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 黄色粘着トラップでの越冬成虫の誘殺頭数は、場内の県予察ほ場(無防除)では平年並、日高郡由良町ではやや多かった。発生時期は平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イヌマキやサンゴジュなど防風樹近くでの発生が多い。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 昨年10月の巡回調査では、「富有」における発病葉率は24.4%(平年34.6%)と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発園では、この時期の防除を徹底する。
- ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
- ③ 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらってていねいに散布することが大切である。

2. 円星落葉病、角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 円星落葉病 やや多、角斑落葉病 並
- (2) 予報根拠
 - ① 昨年10月の巡回調査では、「富有」における円星落葉病の発病葉率は7.0%（平成1.5%）と平成よりやや多く、角斑落葉病の発病葉率は20.8%（平成21.8%）と平成並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 円星落葉病の子のう胞子飛散は、5月下旬～7月中旬の降雨後に多くみられるので、マンネブ、マンゼブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 黄色粘着トラップでの誘殺数は平成並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 落弁期を中心に防除する。
 - ② マキやサンゴジュなど防風樹の近くで発生が多い。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① チャバネアオカメムシ成虫の1カ所あたりの越冬虫数は、県北部では0頭（平成0.2頭：極端に多かった年を除く）、県南部（有田以南）では0頭（平成0.3頭：極端に多かった年を除く）と、いずれも平成に比べやや少なかった。
 - ② スギ・ヒノキの球果は昨年より多いと予想されるので、夏以降の果樹園への飛来は少ないと考えられる。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ウメ・モモ（主に山間部周辺園）等では、収穫前の越冬成虫の多飛来に注意する。
 - ② カメムシ類の発生状況は、県農林水産総合技術センターのホームページの技術情報の果樹カメムシ情報を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ホームページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2301)までお願いします。